

食卓は笑う

開 高 健



新潮社版

食卓は笑う



開高健



新潮社





しょくたく わら
食卓は笑う

定 価 800 円

印 刷 1982 年 11 月 25 日

発 行 1982 年 12 月 1 日

著 者 かいこう たけし
開高 健

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 162／東京都新宿区矢来町 71

振替：東京 4 -808

電話：業務部 (03) 266-5111

編集部 (03) 266-5411

印刷所 株式会社光邦

製本所 加藤製本株式会社

© 1982 Takeshi Kaiko, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

●装画

柳原良平

●カバー・本文レイアウト

木幡朋介

●本文イラストレーション

柳原良平

14 17 23 45 46 50 61 63

ロナルド・サール

31 99 103 106 110 133

加藤芳郎

36 75 76 95 114 116

ヴァージル・パーチ

71 72 85 86 88 90 119

開口閉口

読書の楽しみを語り、現代を諷刺し、食味の真髓を探り、釣りの蘊蓄を傾け、世界の酒に及び、人生の深奥を観照する。
——鋭い洞察と卓抜なユーモアに満ちた極上のエッセー。

新潮文庫 定価 400 円

フィッシュ・オン

無垢の大地、清澄な空気、凜冽の水——アラスカの荒野の川での豪壮なキング・サーモンとの闘いを手始めに、世界各地の海と川と湖に糸を垂れた釣師・開高健の世界釣り歩き。

新潮文庫 定価 480円

地球はグラスのふちを回る

世界中の酒場を巡歴した著者が、忘れ難き名酒・珍酒を紹介し、酒にまつわる小咄を披露し、酒を愛する紳士のたしなみを説く。無類に豊饒で、限りなく奥深い「快樂」の世界。

新潮文庫 定価320円

「食卓は笑う」目次



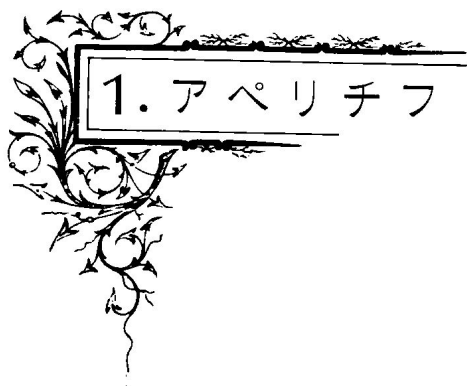
1	アペリチフ	7
2	オードブル	13
	中間階級	14
	天国と地獄	15
	警察結婚	20
	痛いかえ、おまえ	22
3	スープ	25
	女、この強きもの	26
	飲む・食べる・笑う	34
4	魚料理	41
	大きいか、小さいか	42
	正直は最善の策	49
	小物自慢	51
5	肉料理	55
	アサド	
	焼肉の周辺にて	56
	髪の色と黒	60
	手袋や帽子について	68

11	水を一杯……………	135
10	病いは深い……………	126
9	食後の散歩……………	125
8	葉巻……………	121
7	夜の大統領……………	113
6	砂漠の雪……………	108
5	協力はすれども……………	105
4	戦争と平和……………	98
3	アイスクリーム……………	97
2	ただならぬ気配……………	94
1	ほんのひとひねり……………	92
0	汚れがめだつ……………	84
7	チーズ……………	83
6	煙りも出ません……………	80
5	ニッポンも笑う……………	74
4	サラダ……………	73



食卓は笑う





1. アペリチフ



「ラ・ジョワ・ド・ヴィーヴル」というフランス語は、「生きる歓び」と訳されていますが、これが最も濃厚、活発に見られるのが、食事の席。フランス人だけではなくて、イギリス人もイタリア人もロシア人も、むつつりとしていられるドイツ人ですら、食事の席ではみんな小話をします。

人を招くほうも、招かれたほうも、今日何かひとつ面白い話をしてみんなを笑わせよう、楽しませようと、義務づけられているわけではないがほとんど義務のよう感じてやってきます。そして、ワイワイガヤガヤと、楽しみつっ食事する。もちろん、ワイワイガヤガヤといつても、口を開けば、スープと肉の切れっ端とサラダ菜とマヨネーズが、右へ動いたり左へ動いたりしているのが見えるというような口の開き方ではありませんが……

しかし、日本人が西洋料理店で食事をしているのを見ると、ネクタイを締めて端然と座り、ものも言わずに、神妙に、お通夜の席に来たみたいな格好で飯を食っている。カチャリとフォークやナイフが皿に当たる音がすると、飛び上がるような格

好になる。なんであんなに脅えた格好で飯を食わなければいけないのでしょうか。

たとえば、西洋の食事では、御鳴楽をするのはまあまあ許されるけれども、ゲツプは御鳴楽よりも犯罪的であると言われていますが、御鳴楽をしてもいいから小話は忘れるな、というのが最大のエチケットでしょう。また、小話をやっていて、全員がゲラゲラ笑った後で、なんとなく全員が黙り込んでしまうような、しれつとした瞬間がくるときがあります。すかさずだれかが「いま、神様がお通りになった」と言う。そうすると、みんなが元気を取り返して、「実はその神様だがネ」と言つて、また小話を始めます。ここには、どうせ食事が終われば、辛い、酸っぱい、辛い人生が始まるんだから、せめて飯を食っている間だけでも、慰めあい、励ましあい、楽しみあおうじゃないかという精神がある。これが食事をするときの本当の姿ではないでしょうか。

この間、私は南北両アメリカ縦断旅行をやりましたが、とくに南米人はラテン気質で、小話が好きです。ブラジル語では「ピャーダ」、スペイン語では「チステ」といい、チステの心得がないと、ほとんど食事の席につくことができないと言つて

もいいぐらいのありさまでした。入れ替わり立ち替わり何人もが小話をぶつつけてくる。こちらは応戦防戦に大わらわ。ところが、私は息子ぐらいの年の違う若者を五人連れていたんですが、だれも小話をやりません。ムーツとしたまま飯を食っています。これは非常にエチケツトに反することです。人に招かれたときのエチケツトぐらいはわきまえておきたいものですナ。

私は、これまで諸外国の日本の大使館で、大使や公使や領事などと食事をするところがありました。しかし、彼らもまたおしなべて食卓の席を笑いでみたすエチケツトをわきまえていません。単に外交官としてふるまっているだけで、ジョークが全然できません。私が教えてあげたくらいでした。

今後、国際情勢ますます緊迫の折から、外交官は笑いを絶対に欠かすことはできません。チャーチルの例をごろんなさい。その他無数の例をごろんなさい。ちよつと笑うか笑わないかで小さなことが変わると、大きなことがまま変わるものです。したがって、日本の外務省が、大使、公使、領事その他を国外に送り出すとき、また新聞社が特派員、商社が駐在員を送りだすとき、成田空港でユーモア度テストを